

# いじめ経験時の非効果的な周囲のサポートといじめ経験の長期的影響との関連性の検討

## The Relationship between Ineffective Social Support around the Time of the Bullying Experience and the Long-term Effects of the Bullying Experience

齊 藤 英 俊

### 要旨

本研究では、いじめ被害経験者にとっていじめ被害経験時の周囲の人たちの関わりのうち役立たなかった、非効果的なサポートの内容を検討することを目的とした。過去にいじめ被害経験をもつ青年期の人を対象に、いじめ被害経験時に役立たなかったと思う周囲の人の関わりの内容を自由記述で回答してもらった。その結果、非効果的なサポートの特徴には「いじめへの消極的な対応」、「いじめ被害の相談に関すること」という2つの共通する点があった。一方、先生、友人、親のそれぞれの立場、役割が反映された側面も見られた。

**キーワード：**いじめ(bullying)／周囲の関わり(social support)／非効果的なサポート(ineffective support)

### 問題

「いじめ」の問題は、教育場面における課題でもあるが、それを受けた長期間後にも精神的・身体的な影響を及ぼすことが明らかにされてきており(立花, 1990; 坂西, 1995; 香取, 1999; 森本, 2004; 三島, 2008; Sourander et al, 2000)、いじめ被害を経験することは、いじめ経験時だけでなく、いじめ経験後においても重要なテーマである。

また、周囲の関わり、いわゆるソーシャルサポートがいじめ被害の苦痛を和らげ(Malecki, et al, 2008)、いじめ被害者の身体的症状を少なくする効果があることが指摘されており(Gini, et al, 2009)、いじめ経験といじめ経験時のソーシャルサポートには関連性があることがわかっている。齊藤(2017)においては、いじめ被害経験者を対象にいじめ被害時に周囲のサポートで役立った、効果的なサポートとを感じるものについて検討を行った。

その一方で、対人関係はストレスの要因になる

こともあり、いじめという対人関係の中で起こる現象においても、他者の関わりや支援が効果をもたらさず、非効果的になる場合もあると考えられる。

そこで、本研究では、いじめ被害経験者にとって先生、親、友だちといった周囲の関わりで役立たなかった、非効果的なサポートであったと感じている関わりについて探索的に検討することを目的とする。

### 方法

#### 調査参加者と調査方法

過去にいじめ被害経験をもつ18～24歳の300名(男性104名：女性194名, 平均年齢：21.66歳)を対象に、2012年1月に学術的な調査を行っているリサーチ会社に委託し、インターネットによるネット調査を実施した。

#### 質問紙の構成

**いじめ被害経験の時期** 小学校1年～高校3年までの間で1つ選んでもらった。複数ある場合は、一番辛かった経験について回答を求めた。

**いじめ被害経験の長期的な影響** 松下(2005)の過去のネガティブな経験への現在の意味づけの結

果を参考に「1. 今でも辛い苦しいものと考えている」(マイナスの影響と想定)、「2. 自分を成長させてくれたものと考えている」(プラスの影響と想定)の2項目のどちらかを選択し回答を求めた。

**いじめ経験時のソーシャルサポート**<sup>1</sup> 「自分を成長させてくれたものと考えている」と回答した者に、いじめ経験が「自分の成長」に結びつく上で、当時あるいはその後に出会った「先生」・「友人」・「父親」・「母親」のそれぞれの人の関わりが役立ったかを尋ねた。それぞれ「役立った」・「役立たなかった」の2つから1つ選んでもらい、回答を求めた。

**分析方法**

得られたデータをもとに、KJ法を参考に、自由記述の内容を分類した。複数の内容が含まれているものは、それぞれ分類し、内容が分からないものに関しては除外した。

**結果**

**いじめ被害経験の長期的影響**

マイナスの影響を感じている人よりもプラスの影響を強く感じている人の方が多い傾向が見られた(表1)。

**表1 いじめ被害経験の長期的影響の結果**

1	今でも辛い苦しいものと考えている。	133
2	自分を成長させてくれたものと考えている。	167

**いじめ被害経験時に役立たなかった周囲の関わり  
の検討**

本研究では、それぞれの人(サポート源)の関わりのうち、いじめ被害経験者でも「2. 自分を成長させてくれたものと考えている」と回答したプラスの影響を強く感じている人にとって、役立たなかった関わり、非効果的なサポートにはどのような側面があるかを検討する。

**1) 先生**

先生との関わりにおいては、役立たなかったと回答した人が多かった(表2)。

**表2 先生との関わりが役立ったかどうかの結果**

1	役立った	48
2	役立たなかった	119

**先生の役立たなかった関わりの内容**

先生の役立たなかった関わりには、大きく「いじめへの態度」、「本人への態度」、「先生自身のこと」のカテゴリーに分類された。

「いじめへの態度」は、先生のいじめに対する否定的な態度の内容に関するものである。この中の「無関心」はいじめに対して見て見ぬふりといった内容、「何もしない」はいじめがあることを知ってはいたが何もしてくれないといった内容、「不適切な対応」は一緒にいじめるといった先生として適切でない対応の内容、「知らない」はそもそもいじめがあることを先生は気づいていない

**表3 先生との役立たなかった関わりの内容の結果**

大カテゴリー	小カテゴリー	例
いじめへの態度	無関心	見て見ぬふり。
	何もしない	何も対策をしてくれなかった。
	不適切な対応	一緒にいじめていた。
	知らない	知らない。気付いていない。
本人への態度	相談に乗らない	仕方のないことだと相談にも乗ってくれなかった。
	味方せず	味方になってくれなかった。
先生自身のこと	偏った見方	生徒を信用しない。いじめを正当化する。
	先生の特長	指導力がない、先生も原因の1つ。

といった内容が含まれた。

「本人への態度」は、いじめを受けている本人に対しての先生の不適切な態度に関する内容である。この中の「相談に乗らない」はいじめの相談を取り合ってくれないといった内容、「味方せず」は本人の味方にならないといった内容が含まれた。

「先生自身のこと」は、先生自身の物事に対する見方や先生の特性的内容に関するものである。この中の「偏った見方」は先生自身のいじめや生徒に対する偏った見方といった内容、「先生の特性」は先生の指導力のなさや性格といった内容が含まれた。

## 2) 友人

友人との関わりにおいては、役立った関わりと役立たなかった関わりはほぼ半数であった(表4)。

表4 友人との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	81
2	役立たなかった	86

### 友人の役立たなかった関わりの内容

友人の役立たなかった関わりは、以下のように分類できた(表5)。

友人の役立たなかった関わりとして、大きく「いじめへの関わり」・「友人との関係」の内容に分類された。

「いじめへの関わり」は、いじめに対して友人の良くなかった関わりの内容である。この中の「いじめの側」は友人自身がいじめの側になるといった内容、「関与拒否」はいじめに対して関わろうとしないといった内容、「知らない」はそもそもいじめの存在を知らないといった内容が含まれた。

「友人との関係」は、本人と友人との否定的な関係である。この中の「相談せず」は相談にのってくれなかったり、相談しなかったといった内容、「いない」はそもそも友人がいなかったといった内容が含まれた。

## 3) 父親

父親との関わりにおいては、役立たなかったと回答した人が多い傾向にあった(表6)。

表6 父親との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	35
2	役立たなかった	132

### 父親の役立たなかった関わりの内容

父親の役立たなかった関わりとして大きく「話すこと」、「接する機会の少なさ」、「いじめへの認識」の内容に分類された(表7)。

「話すこと」は、いじめのことを父親に話せなかった内容に関するものである。この中の「相談しない」はそもそもいじめのことを話したり、相談したりしていないという内容、「話したくなかった」は父親にいじめられているという事実を知られたくないという気持ちからいじめられていることを言わなかったという内容、「話せなかった」は父親にいじめのことを話すと心配をかけたり、悲しませそうという気持ちから言えなかったといった内容が含まれた。

「接する機会の少なさ」は、父親との接する機会が少なかったことに関する内容である。この中の「物理的要因」は仕事が忙しいなど父親と普段の生活で接する機会が少なかったなどの物理的要因の内容、「心理的距離」は父親と接する気持

表5 友人との役立たなかった関わりの内容の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	例
いじめへの関わり	いじめの側	友人からもいじめにあった。友人にも裏切られた。
	関与拒否	親しかった子に距離を置かれた。友人もいじめを見ているだけだった。
	知らない	気付いていなかった。
友人との関係	相談せず	相談相手にはならなかった。
	いない	友人という友人すらいなかった。

表7 父親の役立たなかった関わりの内容の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	例
話すこと	相談しない	相談していない。相談しようとも思わなかった。
	話したくなかった	バレたくなかったので相談しなかった。知られたくなかった。
	話せなかった	悲しませそうと言えなかった。打ち明けられなかった。
接する機会の少なさ	物理的要因	仕事も忙しく接する機会も少なかった。日常的に顔を合わせる機会が少なかった。
	心理的距離	特に仲もよくないので。あまりいい父親ではなかった。
いじめへの認識	知らない	事実すら知らなかった。
	対応せず	何もしてくれなかった。関心を示さなかった。

ちがあまりなかったという心理的な要因からくるもの内容である。

「いじめへの認識」は、父親がいじめの事実をどう認識していたかという内容である。この中の「知らない」はそもそもいじめの事実を知らないという内容であり、「対応せず」はいじめの事実を知ってはいたが何も対応をしてくれなかったという内容が含まれた。

#### 4) 母親

母親との関わりでは、やや役立たなかったと回答した人が多かった(表8)

表8 母親との関わりが役立ったかどうかの結果

1	役立った	74
2	役立たなかった	93

役立たなかった関わりとして、「話すこと」と「いじめへの対応」の2つの側面に分類された(表9)。

「話すこと」は、いじめを母親に話したかどうかに関する内容である。この中の「相談しない」は母親に相談しなかった内容、「話したくなかった」はいじめの事実を母親に知られたくないため話さなかった内容、「話せなかった」は話す機会がなかったり、母親の気持ちを気にして話せなかった内容が含まれる。

「いじめへの対応」は、母親がいじめに対してどのような対応を取ったかに関する内容である。この中の「関与せず」はいじめの事実に対して何も関与しなかった内容、「本人への指摘」は本人に対して改善点などを指摘するといった内容が含まれた。

表9 母親の役立たなかった関わりの内容の結果

大カテゴリー	小カテゴリー	例
話すこと	相談しない	相談していない。話していない。
	話したくなかった	家族に秘密にしていた。バレたくなかったので相談もしなかった。
	話せなかった	いつも忙しそうで話せなかった。悲しませそうと言えなかった。
いじめへの対応	関与せず	大きな問題ととらえられず、流された。
	本人への指摘	自分が悪いからであると言われた。がんばって学校にいきなさいとしか言わなかった。

## 考察

### 1. 周囲の人の関わりが役立ったかについての検討

先生、友人、父親、母親といった周囲の人の関わりで役立った関わりと役立たなかった関わりの割合は、すべて役立たなかった関わり的人数が多く、特に先生、父親において割合が多かった。今回は、いじめ被害経験からのプラスの影響を強く感じている人を対象にしたわけだが、そのような人であっても周囲の関わり、サポートは役立たない傾向にあることが示された。

この点は、いじめという人間関係で起こる現象が、周囲の関わり、サポートといういじめ被害時の他の人間関係にも影響を与えている可能性があり、今後より検討する必要があると考えられる。

### 2. 関わる人（サポート源）別での関わりの内容の検討

それぞれのサポート源の役立たなかった関わりの内容を検討する。

先生では、役立たなかった関わりにおいては、「いじめへの態度」では、いじめに対しての消極的な態度や不適切な態度が見て取れる。「本人への態度」では、本人の味方にならないといった本人にとって頼れない存在だったと思われる。「先生自身のこと」では、先生自身がいじめを正当化したり、いじめを助長するような関わりや先生の指導力や性格といったものがいじめ解決につながる場合があると思われる。これらの態度は、どれもいじめの直接的な解決につながらず、役立たない関わりと考えられる。

友人では、役立たなかった関わりにおいては、友人からいじめられるといった経験は役立たなかった関わりとしてだけでなく、本人の苦痛やマイナスの影響を与えるような関わりと言える。また、いじめに関わってくれなかったり、相談に乗ってくれない、友人はいないといったように友人との関係がよくなかったことが見て取れ、そのことが役立たなかった関わりにつながると考えられた。

父親では、役立たなかった関わりにおいては、いじめのことを「話すこと」では3つの側面が見られた。そもそも父親には相談しなかった、話さなかったという部分があれば、父親にはいじめのことを知られたくないという気持ちから話さな

ったという部分、いじめのことを話すことで父親が心配するといった父親の気持ちを考慮して言わなかった部分と、いじめのことを話さないにしても、それぞれ異なる心理が反映されていると考えられる。この点は、親に対していじめられていることを話すことへのいじめ被害者の複雑な心境が読み取れる。そのため周囲の大人は、いじめ被害者の行動面だけでなく、本人の意思や心理的側面に考慮する必要があると思われる。物理的に少ない場合や心理的に距離がある場合という2つの側面から、父親と接する機会が少ないことも関わりの内容として挙げられた。仕事などで家にいないなど物理的に接する機会が少なく、父親と話したくても話せないという場合が考えられ、役立たなかった関わりにつながったと思われる。また、父親とは心理的に距離を感じて、接する機会が少なかったということに対しては、例えば中学生など思春期という第2次反抗期の時期のときに、父親に頼りたいが自分でなんとかしたいというアンビバレントな気持ちが反映されていると考えられる。いじめの認識においては、そもそもいじめのことを知らなかったり、知っていても対応してくれなかったという父親の関わりは、本人にとって不本意なことであり、このことが役立たなかった関わりにつながったと思われる。

母親では、役立たなかった関わりにおいては、父親と同様にいじめのことを話すことにも3つの側面が見られた。母親においても、いじめのことを話すことは、複雑な心理があることが伺える。また、いじめへの対応においては、いじめに対して関わらなかったりといった消極的な態度は、本人にとっては望んでいない態度であると考えられる。さらに、自分に原因があるのではといった指摘は、いじめを受けて傷ついている本人にとってつらい対応である。このような本人の立場に立っていない対応は、役立たなかった関わりにつながると考えられる。

### 3. 役立たなかった関わりの内容の検討

役立たなかった関わり、非効果的なサポートの内容を見ていくと、いくつかの共通点があった。

1つに、いじめへの関わりは概して消極的な対応であった。無関心であったり、何も対応をして

くれなかつたりといった消極的な関わりであった。さらに、友人の関わりにおいては、友人がいじめの側にまわるといったマイナスの関わりも見られた。これらの関わりはいじめ被害者にとって、サポートが得られず、つらい状況におかれると思われる、役立たない関わりとなってしまうと考えられる。

2つに、相談できなかつた、相談しなかつたというようにいじめ被害の相談に関する点で共通する点があつた。外傷体験の他者への開示が心身の健康に良い影響をもたらすことがわかつており(Pennebaker, 1989)、いじめ被害経験のような外傷体験の開示も心身の健康に良い影響を与えることが考えられるが、逆に相談できない、話を聞いてもらえないということは、心身にマイナスの影響を及ぼすことが考えられる。また、話したくても聞いてもらえないということは2次的な外傷体験にもつながる可能性があり、このようなことを含めても、これらの関わりは役立たなかつたものと言える。

また、相談しなかつたという側面に関しては、人に相談するなど人の援助を求める援助要請の研究によると、援助要請の困難さの中には「相談しない」、「相談しすぎる」、「相談がうまくいかない」の3つがあることが示されており(本田, 2015)、どのように人に援助を求めるかも重要になってくる。いじめ被害経験を人に相談しないことは、親に心配をかけるといった他者を配慮する要因もあると思われるが、いかに、どのような人に相談するかといった相談要請のスキルを身につけていくことも重要であろう。特に、いじめのように人間関係の中で起こる現象においては、いじめの認識は立場によって違ってくる場合がある。その意味でも、どのような人に相談すればよいかといったスキルを身につけていくことも大切なことだと思われる。しかし、いじめ被害経験者は、いじめ被害経験がない人よりもソーシャルサポートが低いことが示されており(菱田ら, 2011)、いじめ被害者が相談できる環境にいることが少ない場合があることが考えられる。そのため、いじめ被害者が援助要請スキルを高めると同時に、いかに周囲の人が相談しやすい、援助要請行動を起こしやすい雰囲気をつくっていくかが重要になってくると

考えられる。

本調査の結果からすると、いじめ被害経験をプラスにとらえている経験者でも、周囲の関わりが役立つたと感じる人よりも、役立たなかつたと感じる人の方が多かつた。それは、いじめという対人関係の中で起こる現象も関係してくると思われるが、いじめが深刻になるのを防止するためには、周囲の関わり、介入が重要になってくる。そのためにも、役立つた周囲の関わりと役立たなかつた周囲の関わりと比較検討を通して、どのような関わりがいじめ被害時に効果的なのかを検討し、明らかにしていくことが必要だろう。

#### 〈注〉

1. 本調査では、「今でも辛く苦しいものと考えている。」と回答した人には、いじめ経験時の「先生」、「友人」、「父親」、「母親」がどのような態度・対応であったかを自由記述で回答してもらっているが、紙面の関係のため本論では取り上げない。マイナスの影響を強く感じている人とプラスの影響を強く感じている人の周囲の関わりの違いを通しての効果的なサポートの検討については、今後の課題としたい。

#### 謝辞

本研究に多大なご支援、ご協力をいただいた安保英勇先生(東北大学)に感謝申し上げます。

#### 〈引用文献〉

- 本田真大(2015). 援助要請のカウンセリング 金子書房
- Malecki, C. K., Demaray, M. K., Davidson, L. M. (2008). The Relationship Among Social Support, Victimization, and Student Adjustment in a Predominantly Latino Sample *Journal of School Violence*, 7, 48-71.
- Gini, G., Carli, G., Pozzoli, T. (2009). Social support, peervictimization, and somatic complaints *Journal of Paediatrics and Child Health*, 45, 358-363.
- 菱田一哉・川端徹朗・宋昇勲・辻本悟史・今出有紀子・中村晴信・李美錦・堺千紘・菅野瑤・三島枝里子・島井哲志・西岡伸紀・石川哲也(2011). いじめの影響とレジリエンシー、ソーシャル・サポート、ライフスキルの関連 *学校保健研究*, 53, 107-126.
- 香取早苗(1999). 過去のいじめ体験による心的影響と心の傷の回復方法に関する研究 *カウンセリング研*

究, 32, 1-13.

松下智子 (2005). ネガティブな経験の意味づけ方と開示抵抗感に関する研究 心理学研究, 76, 480-485.

三島浩路 (2008). 小学校高学年で親しい友人から受けた「いじめ」の長期的な影響—高校生を対象にした調査結果から— 実験社会心理学研究, 47, 91-104.

森本幸子 (2004). 過去のいじめ体験における対処法と心的影響に関する研究 心理臨床学研究, 22, 441-446.

Pennebaker, J. W. (1989). Confession, inhibition, and disease. In L. Berkowitz (Ed) *Advances in experimental social psychology*, 22, 211-244.

坂西友秀 (1995). いじめが被害者に及ぼす長期的な影響および被害者の自己認知と他の被害者認知の差 社会心理学研究, 11, 105-115.

齊藤英俊 (2017). いじめ経験時の周囲の関わりといじめ経験の長期的影響との関連性の検討 北陸学院大学・北陸学院短期大学部研究紀要, 9, 23-30.

Sourander, A., Helsela, L., Helenius, H., & Piha, J. (2000). Persistence of bullying from childhood to adolescence: A longitudinal 8-year follow-up study. *Child Abuse & Neglect*, 24, 873-881.

立花正一 (1990). 「いじめられ体験」を契機に発症した精神障害について 精神神経学雑誌, 92, 321-342.

